

やつし侍

小松重男



新潮社

小松重男

やつと侍



新潮社

やつとこ侍ざむらい

平成二年二月十五日印刷

平成二年二月二十日発行

著者 小松重男こまつ しげお

発行者 佐藤亮一さとう しょういち

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七十一番地

電話 東京(266)五一一(業務)

東京(266)五四一一(編集)

振替 東京四八〇八千一六二

印刷 錦明印刷株式会社
製本 植木製本株式会社

乱丁落丁本は、ご面倒ですが小杜通信係宛お送り下さい。送料小杜負担にてお取替えいたします。

||||||| © Shigeo Komatsu 1990, Printed in Japan |||||

価格はカバーに表示してあります。

ISBN4-10-349603-7 C0093

やっところ侍・目次

とつくり侍.....5

やっところ侍.....41

三毛猫侍.....75

ぺつぽつ侍.....103

田沼恋しき.....137

びすかうと.....171

装
画
熊田正男

やつとこさむらい侍

とつくり侍さむらい

一

弘化四年九月三日の夜五つ半（九時ごろ）過ぎ、富田文治は俵を担いで、よろよろと歩いていった。

俵の中身は米でも芋でもない。

「おまえさん。おまえさんってば」

「しいっ。さように大きな声を出すでない。夜回りに怪しまれる」

「え、なんぞ、お言いかい」

「静かにしろと申したのだ」

「おまえさん。あたしの頭が……」

先になっっているので文治の聲が聞き取りにくい、お尻のほうが先になるよう俵の向きを変えてくれ、と女は言った。

「分かった。しかし……」

いちど地面に下ろすと、また担ぎ上げるのが難儀だ、どこぞ台になりそうな物を見付けて向きを変える、それまで辛抱しろ、と文治は俵に口を付けて言い聞かせた。

「おまえさん、重いだろう」

「静かにしろと申すに……」

ほんとうは獸物店横丁を通して行くほうが近道なのだが、もし獸肉屋の奉公人に見られて、つきり猪か鹿を売り込みに来た若党、などと勘違いされては困る。わざわざ遠回りして柳原土手下へ出た。

ここは、いわゆる「柳原物」の粗悪廉価な古着を商う九尺間口の床店が十町余りもつづいてゐる片側町で、昼間なら賑やかな所だけれども、夜は取り片付けられて、ばらした板や柱が土手際に積み上げてある。夜鷹たちの恰好な稼ぎ場所だ。

しつこい夜鷹にまとい付かれますと面倒なことになると、と怖れながら足を進めたが、米俵なんぞ担いでゐる男相手では商売にならぬと思うのか、だれ一人として声など掛けてこない。

ちようど肩の高さほどに床店の板が積み上げてあつたので、これを台にすれば容易く俵の向きを変えられる、と思つたが、さっそく夜鷹に寄つて来られたら……、と思ひ直した。

しばらく土手下を行つて和泉橋を渡り始めた。たつぷり降つた雨で水嵩の増した神田川が音を立てて右手のほうへ流れて行く。

向こう岸の佐久間町一丁目から四丁目へつづく川つぷちの道を、おおぜいの人たちが題目太鼓を鳴らしながら歩いている。

「お源。おまえにも聞こえるだろう」

「あい。どんつくどんつく……。外は寒いだろうに法華の衆は元氣だねえ」

「おまえはじゅばん繻胖一枚きりで寒くないか」

「暖あたたか過ぎるくらいですよ」

文治は、ゆつくり橋を渡つて題目太鼓の行列をやり過ごすことにした。なんとなく突つ切るのがためらわれたのである。

そのことを言つたら、俵を欄干の上へ置いて一休みしたら……。と源が勧めた。

「うむ。そうだな」

どっこいしょ、と下ろしたところ、いま背骨が欄干に当たつて痛かつた、と源が文句を言った。

「赦ゆるせ。……ところで、お源。おまえの兄あにさんは、さように怒つておったのか」

「あい。もう取り付く島もないほど……」

二

きよの昼下がり、源は下谷長者町一丁目の裏長屋に住んでいる兄を訪ねた。

「おいら、しょっちゅう東神田辺へは仕事に行くけど、そんな名前の旗本なんぞ聞いたこともねえな」

兄の松五郎が、いまいましげに吐月峰へ煙管を叩き付けた。

「どうせ徳利門番の屋敷に住んでやがる貧乏旗本だろうぜ」

徳利門番の屋敷とは、あんまり貧乏で門番なぞ置けないから門扉に小石を詰めた一升徳利を仕

掛けておき、その重みで、ちよつと押せば軽く開き、また手を放せば自然に閉まるように細工してある、つまり徳利を門番がわりにしている屋敷のことだ。

「え。お源ちゃん、御旗本とできたのかい」

あにやめ
嫂の糸が、すつとんきような声を出した。

「ばか。そういう小つ旗本の家来と一緒になりてえんだとよう」

「貧乏な御旗本の御家来じゃあねえ」

兄夫婦が反対しそうなので源はあわてた。

「小つ旗本にや違いなくても、その御旗本は、そりやあ御立派な御殿様ですつてさあ」

「てやんでえ。一升徳利に門番させてる武士が殿様なもんけえ。そういうのは、とっくり侍つてんだ。おめえ、まさか、その野郎の子なんぞ孕んじまつたんじゃあねえだらうな」

源は、すっかり打ち明けるつもりで来たのだが、もう、とても、文治の子を身籠もっている、などとは言えなくなつてしまった。

「おめえはもう二十六だ。なんとか……」

「だから、そろそろ身を固めようと思つて」

「うるせえ。黙つて聞け。おれっちが……」

なんとか手に職のある律儀な男と所帯を持たせようと思つて、仲間の左官や、知り合いの大工、屋根葺、建具職などと会わせたのに、いつも四の五の言つて断つたのは、そういうやくざな野郎と一緒にたかつたからなのか、と松五郎は怒つた。

「そんな、やくざだなんて……。ちゃあんと苗字のある、れっきとした御武家ですよ」

「ばか。御武家が聞いて呆れらあ。草履取や中間に毛の生えたような若党なんざ武家じゃあねえ。武家奉公人ってんだ」

「そりゃあ、奉公人にや違いなけれど……」

源は、むきになって、その人は本物の刀を二本差しているし、木綿ながら羽織袴も着けている、と言いつた。

「けつ。くたびれた袴の股立なんぞ取りやがって、がらくた丸だか赤鯛だか知れねえ代物を二本も差しちゃあ、てくてく主人の供をして歩く、あんなみつともねえのを亭主にしてえのかよ。やめとけ、やめとけ。でえいち、その野郎め、いつてえ、いくら給金を取ってやがんでえ」

「いまは大部屋に寝泊まりして、おまんまも御屋敷でいただくから……」

源は小さな声で、「まだ年に二両ぼちちだけれど……」と言った。

「そうれみろ。三両一人扶持の『三二』にも足りねえじゃあねえか。おめえのほうが野郎より余計取ってる。な、そうだろう」

「うん」

源は、いま年に三両二分の給金を取っている。下女の給金としては相場だ。

「でもね、女房を持って通い勤めになれば、どうにか所帯を張ってゆけるだけは大さる、と思うから……」

手頃な住まいを探したいので手伝ってくれ、と頼んだら、あっさり断わられてしまった。

いつもは口数の多い糸も、むつり押し黙っている。やっぱり手土産を持って来るべきだった、と気付いた源は、おくればせながら甥や姪たちに四文銭を一枚ずつ与えた。

「おばちゃん。ありがとう」

こどもらは口々に礼を言つて雨の路地へ飛び出して行つた。自身番の番太郎が内職に商つてゐる飴菓子でも買つて来るのだろう。

「いつも済まないねえ」

おもわくどおり糸の口は動き出したが、それなら空店あきだなを探してやろう、とは言つてくれない。きつと、請人になつて店賃たなちんの尻拭いなんぞさせられたら困る、と思つてゐるのだ。

源は、けつして迷惑は掛けないから……、と座り直して頭を下げた。

「おまえさん。どうしたものだろうねえ」

根が気のいい糸は松五郎に向かつて、「探して上げなよ」と言つた。

「だめだ、だめだ。おいらみたように……」

日に三百文以上も手間賃を稼ぐ腕のいい左官だつて、こう雨降りの多い月は、きまつた日に店賃を届けられない、ましてや日当に直せば三十文そこそこの給金しか取れない野郎なんぞ……、と首を振る。

「でえてえ、てめえの屋敷内うちに所帯持ちの若党を住ませる長屋も建てられねえような小つ旗本じゃあ、そのうち、たつた二両の給金だつて払つてくれなくなるかも知れねえぞ。そもそも、その富田文治ふでつて野郎は親の代から奉公してゐる家来けれなのか。それとも、そつちこつちと渡り歩いてやがるやつなのか。どっちなんだ」

源は言いにくそうに、つい先月、以前奉公してゐた屋敷から暇を取つて、いまのところへ住み替えたばかりなのだ、と答えた。

「いけねえ、いけねえ。おいらが思ったとおりの野郎だぜ」

「兄ちゃん。怒らないで聞いて……」

とうとう自分との仲が屋敷中の噂になつて、いられなくなつたのだ、と文治が暇を取つて、いまの屋敷へ住み替えたわけを打ち明けた。

「だったら奉公人同士の不義密通じゃあねえかよ。あぶねえ、あぶねえ。その野郎が中間に毛の生えた若党で、おめえが下働きの下女だから男の住み替えぐれえで済んだけど、もし野郎が本物の武士で、おめえが腰元かなんぞだったら、たちまち御手討ものだぜ。な」

源は黙つて頷いた。じつは、つい先刻、下女たちに采配を振っている意地悪な女中頭から同じことを言われたのである。

きょうは朝から降っている、おまえの兄も家にいるだろう、すべてを打ち明けて身の振り方を相談して来い、と厳しく言い付けられ、もしも噂どおり身籠もっているのだったら、おまえも主人へ知れないうちに暇を取れ、と暗に「お払い箱」を申し渡されて来たのだ。

まだ腹は目立つほど脹れてないが、やはり子の分だけ目方が増えているとみえて、からだが重くて動くのが大儀になつたし、いやに食が進む。自分では分からないけれども、顔などに徴が現われているのかも知れない。

糸が、「お源ちゃん、きれいだから男にもていいねえ」と羨ましそうに言つて、「おめえは口をきくな」と松五郎にどやされた。

「お源。おめえ、男にもてる、とかなんとかいい氣になつてやがると、そのうち、この世の地獄へ叩き売られちまうぞ」

「そういう心配なら、まるで御無用。江戸で生まれ育ったくせに野暮天の……」

上に「ばか」を付けたほうがいいほど正直な男だ、と源は富田文治の性情を述べた。

「そうか、そうか。もともと若党しかできねえ能なしの愚図野郎なんだ。ますますいけねえや。まず、先行き出世の見込みはねえな」

「そんなこと、どうして分かるのさ」

源は腹を立てた。

「左官が年を取れば親方の厄介者になるだけだけど、お武家奉公の人は、だんだん……」

「出世するってのか。そりゃあ大身の殿様に仕えているやつのことよ。それだって、人並以上の能があつて、よっぽど運が好くなくちゃあ駄目だ」

松五郎は、三両が相場の給金を二両しか出せないような「とっくり侍」の屋敷に、いくら長いこと辛抱したって、せいぜい借金取りに頭を下げるだけが役目の老耄三太夫^{おいぼれさんたゆう}つとところが関の山だ、と断言した。

「つまり傍目^{はため}にも哀れな「飼い殺し」^{かひころし}つてやつよ。なまじつか苗字なんぞ名前の上にくっ付けやがつて身分が上だと思つてゐるから、こどもが商人や職人^{あきんど}になんたくても、うん、と言えやしねえ。親と同じ「飼い殺し」だ。そういう可哀相な人をおおせい知つてゐるぜ」

源は、いつそう腹を立てた。

「兄ちゃんの子たちは可哀相じゃあないもんね。どうも、お邪魔いたしました」

源は、そそくさと帰り仕度を始めた。

「おい。今夜は泊まって行くんじゃないやあなかったのか。どうしても帰るんなら夕飯^{けえ}を食つてからにし